

第 21 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

レポート：岸 奈治郎 (岐^{きし}至 漢方クリニック)¹

開催日 2016 年 7 月 2 日

今回は前回提示された症例について、処方された薬を示し詳しく解説するスタイルで進行しました。

【処方】

生黄耆 10g	桂枝 6g	赤芍薬 8g	炙附子 4g
猪茯苓各 12g	茵蔯蒿 9g	蒼白朮各 8g	青蒿 9g
蘇葉 6g	旋覆花 6 包	厚朴花 12g	炒萊菔子 10g
黄芩 3g	炒杏仁 10g	炒薏苡仁 30g	竜骨牡蠣各 20g

桂枝、芍薬、附子は桂枝加附子湯の組み合わせです。

「太陽病，發汗，遂漏不止，其人惡風，小便難，四肢微急，難以屈伸者，桂枝加附子湯主之。」（太陽病で太陽病の治療をしたところ発汗したけれどもその汗が止まらず、それでもわずかに寒気がして、小便が出なくなり、手足がこむら返りになり曲がってしまって伸びない者には桂枝加附子湯で治療する。）

汗が漏れてしまうというのは、前回でも話をしましたが衛気が虚しているからです。衛気の虚がもっと進むと表の陽が虚してしまいます。こういうときには黄耆を用いて衛気を補います。この症例ではもっと進行して表陽が虚してしまっています。

黄帝内経素問、生氣通天論に「陽気者、精則養神、柔則養筋」（陽気は精で神を養い、筋肉を柔らかく養う働きがある）とあります。筋肉は津液と陽気で栄養されています。汗が出ると気に津液も陽気も出て行ってしまうので筋がこわばり曲げられなくなってしまいます。汗によって津液を失えば尿も出にくくなってしまいます。

¹ 岐^{きし}至 漢方クリニック

〒370-0053 群馬県高崎市通町 42 八幡ビル 501 号室 <http://takasaki-kanpo.jimdo.com/>

傷寒論太陽病の項に「脈浮緊者、法當身疼痛、宜以汗解之。假令尺遲者、不可發汗。何以知然。以榮氣不足、血少故也。」（脈が浮緊のものは太陽病であって体の痛みがあり発汗解表するのが良い。もし尺脈が遅の者は発汗させてはいけない。それは衛気が不足し血が少ないからである。）と有ります。尺脈が遅いということは腎陽が弱いからであって、発汗させて汗を出させてしまうと、汗と一緒に気・陽気ともに漏れてしまいます。治法は發表温経、処方麻黄附子細辛湯です。もともとエネルギーが少ないために汗をかきにくく、葛根湯などの解表剤を使うとその薬の力だけでは発汗させられないためたくさん使わないと発汗できませんが、一度汗が出始めると止まらなくなってしまいます。

黄帝内経 營衛交重篇で「宗氣積於上焦，營氣出於中焦，衛氣出於下焦。蓋有天，有陽氣，有陰氣。人稟天地之二氣，亦有陰陽，衛氣即陽也，由下焦至中焦，以升於上焦，從陰出陽也。」（宗氣は呼吸によって肺で大気から吸収され）上焦で積み重なり、營氣は（脾が吸収した水穀の精微を受けて）中焦から出て、衛氣は（腎陽を受けて）下焦から出る。蓋に天があり、陽気があり、陰気がある。人は天、地の二気を受け陰陽があり、衛氣は陽であり下焦から中焦に至り、上焦に昇って陰にしたがって陽が出る。）と書かれています。衛氣は腎陽と合わさって作られるため腎と関連が深いです。腎と膀胱は表裏の関係です。体の一番表面にある経絡は太陽膀胱経ですから、当然衛氣と腎の関連も深くなります。

そこでこの症例では、治療に附子が必要なほど陽気が虚しているのです。黄耆を加えて衛氣を補いながら附子で陽を補い鼓舞しています。

傷寒論ではこのように気が損なわれた時には人参を使って補っていました。例としては白虎加人参湯です。裏の熱で汗と一緒に気が脱してしまったのを補う目的です。しかし金匱要略では黄耆が使われています。黄耆桂枝五物湯は、桂枝湯の温通表陽の作用に黄耆の氣を補う効果を加えて増強しています。

・ 黄耆桂枝五物湯(金匱要略)

「血痺陰陽 俱に微、寸口関上微、尺中緊にして、外証は身体不仁、風痺の状の如きは、黄耆桂枝五物湯之を主る。」（血虚による痺れや痛みは陰の氣(營氣)も陽の氣(衛氣)も共にわずかで、寸・関の脈は微細、尺脈は緊張していて、体の見かけは体が思い通りにならず風痺のような病気には黄耆桂枝五物湯で治療をする。）

上記処方では赤芍薬を使っています。赤芍薬は白芍薬よりも活血涼血作用が強いとされています。しかしながら桂枝湯などの処方が構成された時代には、栽培により作られた白芍薬は存在しておらず、芍薬といえば赤芍薬でした。白芍薬と区別するようになったのははっきりしませんが宋代には「図経本草」などに区別されています。この症例では舌が暗紅色のため活血作用を見込んで赤芍薬としています。

桂枝加附子湯は桂枝湯に附子を加えた方剤です。この症例では衛気が虚し表の陽が傷つい

た状態であって、特に傷寒ではありませんが桂枝湯の組み合わせを用いています。桂枝湯は太陽中風の薬と理解されていますが本当にそれだけでしょうか。

成無己の「注解傷寒論」では傷寒論太陽病の項に「病人蔵無他病 時発熱 自汗出而不愈者 此衛氣不和也 先其時發汗則愈 宜桂枝湯主之」(病人で臓、つまり裏に病がない状態なので表だけに病がある場合で時折発熱するが自汗が出ても治らない者は衛氣の不和であるから先ず発熱の無い時に発汗させれば癒える。桂枝湯を使うと良いだろう)とあります。表の病気で汗が出て解表されないのは営衛不和があるからです。

「醫宗金鑑」の傷寒論註 辨太陽病脈證并治上篇では「病常自汗出者、此為榮氣和。榮氣和者外不諧、以衛氣不共榮氣諧和故爾。以榮行脈中、衛行脈外、復發其汗、榮衛和則愈、宜桂枝湯。」(太陽病にかかって常に汗が出る者は榮氣(營氣)が和しているからだ。榮氣が和しているのに外が調和していないのは、衛氣と榮氣が調和していないからだ。榮氣は脈中を行き衛氣は脈外に行く。また発汗させれば榮氣と衛氣が調和して癒える。桂枝湯が良いであろう。)とあります。つまり桂枝湯は営衛不和を調整する薬です。

外邪が表に付くと、邪を追い出すために衛氣が強くなり邪正相争が起こります。すると相対的に營氣が弱くなり営弱衛強になります。衛氣が強くなると発熱し、營氣が弱くなると発汗します。この営衛不和のバランスが崩れたものを桂枝湯は調和するというのです。外邪を除いたり、汗をかかせるということではなく、ただ営衛付和さえ調和してあげれば傷寒中風は改善する、ということです。

ここの症例でも衛氣が虚し、表陽が傷つき汗が止まらなくなっていますから、黄耆で衛氣を補い、附子で表の陽を補い、桂枝湯の成分で営衛不和を調和する組み合わせになっています。

治療で大切なことの一つとして「表の症状があれば裏の状態にも注目する」ということです。たとえば太陽と陽明の合病に葛根湯を使います。これは表実のため閉じてしまい熱が外にいけないため内側に入り込んで陽明に達し下痢になる状態です。これは表の太陽病症状と裏の下痢、陽明の症状に注目しています。治療は葛根湯で表を開いてあげると熱も邪も出て行って太陽病もよくなって、こもっていた熱も外に向かうので治ります。

小青竜湯は方剤の構成を考えると、表に寒邪があり、裏(肺)に湿がある状態です。

大青竜湯は表に寒邪があり、裏に熱があって煩躁している状態です。

それぞれ表に症状があれば裏の状態にも注目しています。そこで今回の症例に注目してみましょう。表には熱が明らかに見られます。裏を考えさせる症状としては舌が胖大で淡なのは陽虚と考えられます。顔がむくみ舌も胖大で白膩苔、頭が重い、全身倦怠感、便が粘っているというのは湿の症状です。ですから、裏に溜まっている湿を取るための薬が必要です。

三仁湯は湿と熱がある状態に使う良い方剤です。

・ 三仁湯(温病条弁)

杏仁 9g 白蔻仁 3g 生苡仁 12g
通草、厚朴各 3g 藿香 6g, 半夏、泽泻各 4.5g,
赤苓、猪苓、淡豆豉各 9g

杏仁は上焦の水源、白蔻仁は中焦の水の運化を助け、薏苡仁は下焦から水を利する。
温病条弁では「頭痛悪寒，身重疼痛，舌白不渴，脈弦細而濡，面色淡黄，胸悶不飢，午後身熱，狀若陰虛，病難速已，名曰濕溫。汗之則神昏耳聾，甚則目瞑不欲言。下之則洞泄。潤之則病深不解。長夏深秋冬日同法，三仁湯主之。」（頭痛悪寒し体中が痛い。舌は苔で白いが口渇は無く、脈は弦細濡、顔色は淡黄色で胸苦しいが飢えては居らず、午後になると体が熱い。若し陰虚であれば病はなかなか治らない湿熱と呼ばれる。発汗させると意識が無くなり耳が聞こえず、眩暈が酷くなってしゃべらなくなる。大小便は出ない。潤すと病は深部に達し治らない。長夏(土)深秋(金)冬(水)で同じ治療法をする。三仁湯を用いる。）杏仁、白蔻仁、薏苡仁の組み合わせによって湿を取り熱を冷ます組み合わせになっているが、今回の症例でも杏仁、薏苡仁を炒めて用いている。炒めることによって杏仁は肺の宣發肅降作用に働くが、通調水道作用を強め利水を促し、薏苡仁は脾胃に働いて滲潤する働きがあるが炒めることによって湿を下に導いて離水する作用を強めている。三仁湯では白蔻仁が用いられているが、白蔻仁は温める作用が強く陰虚や血燥などで火があり寒が無い場合には使ってならないから、この症例では除いている。その代わりに蘇葉、旋覆花、厚朴花など、軽くて表に届きやすく脾胃の気を動かして湿を除くような生薬を入れている。萊菔子は大根の種で辛甘、平 脾胃肺大腸に帰経します。気を降ろし、消化化痰の作用があります。それ以外にも猪苓、茯苓、茵陳蒿、蒼朮、白朮なども組み合わせあってより湿を除く処方となっています。

・ 三子養親湯 (韓氏医通)

萊菔子 蘇子 白芥子

(主治) 痰により気滞がある病態で

(効能) 祛痰降気、消食

この症例の治療薬の中で特に蘇葉、旋覆花、厚朴花は軽くて散らす作用があり、体の上のほうや表面に作用が届きやすい効果があります。強い薬としては枳実、枳殼、厚朴などがありますが、あまりに強い薬では弱った体には合いません。より軽い薬で重い湿を治療する「輕可去実」の妙といえるでしょう。老子の一節に「善為士者不武。善戦者不怒。善勝敵者不与。善用人者為之下。是謂不爭之德、是謂用人之力、之謂配天。古之極。」（良い兵は猛々しくない。良く闘うものは怒らない。良く勝つ者は敵と組み合わない。良く人を使う者はへりくだっている。これが争わないという徳であり、人を用いる力であり、天と並ぶということであって昔から行われていることだ。）とあります。強く重い剛剤を用いて治療するのは必ずしも、いつも正しいというわけではありません。湿があるから利尿剤、眠れ

ないから睡眠薬というのは上手な治療とはいえません。この老子が言うように良く勝つものは闘わないのです。軽い薬で重い病気を治療するというのが治療の上手といえます。

宗の趙佶は「聖劑経」の中で「十劑説」を著しています。生薬の効能によって十種類に分類するというやり方で「宣通補瀉軽重滑澁燥湿」に分類しています。これは弁証と治法がリンクしたやり方でした。その中で澁には竜骨牡蠣などが含まれ、軽には植物の花や軽い葉などが含まれていました。

汗が出るということは表の衛気だけではなく、裏の陽気も漏れてしまいます。状態としては表陽虚になって腎陽不足で内寒になるはずですが。その一方では津液不足があり、一方では湿が溜まりそれが湿熱として化熱しています。しかも舌苔がはがれていて陰虚があることも考えられ非常に複雑な病態です。

黄芩はどちらかというと強い薬でよく冷します。熱があるので冷す薬は妥当ですが、使いすぎると湿が動かなくなってしまう。雑病の治療を記した金匱要略では次のように言われています。「病痰飲者、当以温药和之」（痰飲の病は、当に温薬をもってこれを和すべし）。この症例では熱もありますが湿もあります。熱を冷ますために黄芩を入れると湿が冷えて滞るでしょう。なので、ここでは非常に少ない量を加えることで湿が動かなくなるのを防いでいます。たくさんの量入れたり、複数の冷す薬を入れることはよくありません。

・青蒿 苦微辛 寒 肝胆

効能：清透虚热，凉血除蒸，解暑，截疟。

主治：暑邪发热，阴虚发热，夜热早凉，骨蒸劳热，疟疾寒热，湿热黄疸。

・蒿芩清胆湯（通俗傷寒論）

青蒿、黄芩、枳壳、竹茹、陈皮、半夏、茯苓、碧玉散、(滑石、甘草、青黛)。

主治：少阳湿热证。寒热如疟，寒轻热重，口苦膈闷，吐酸苦水，或呕黄涎而黏，甚则干呕呃逆，胸胁胀疼，小便黄少，舌红苔白腻，间见杂色，脉数而右滑左弦者。

方意：湿が多く鬱滞し熱となり少陽胆経、少陽三焦経の流れを阻害したために、三焦で気が上がらなくなったものを清胆利湿、和胃化痰して治療する。胆経の鬱熱が重く寒熱往来があるけれども熱が重く寒は少しで口が苦く胸脇苦満がある。胆熱犯胃のため胃気上逆し苦い水が口の中に溢れ黄色いよだれを吐く。嘔吐と三焦阻滞のため小便は黄色く少量である。青蒿は少陽の邪熱を清透し黄芩は胆熱を取り湿を乾かす。あわせて用いると少陽の湿熱を取る作用をつよめ邪を排泄する。竹茹は胆胃の熱を取り痰を取り嘔吐を止める。枳実 は気を下げ湿を取り痛みを除く。半夏は燥湿し和胃降逆、陳皮で理気化痰する。この 4 劑で清湿化痰する。赤茯苓と碧玉散は清熱利湿で邪を小便から出させる働きである。

・**龍骨牡蠣** 固澁止汗遺尿

生竜骨は鎮心安神、潜陽の効果があり。煨竜骨は収斂固脱に用いる。生牡蠣は益陰潜陽、鎮驚安神、軟堅散結作用があり、煨牡蠣には収斂固澁の作用となる。虚寒、遺精、帯下、崩漏などの証に用いる。この場合は両方とも生で用いる。

徐靈胎が「医学源流論」の亡陽亡陰の項中で言うには、「当阳气之未动也，以阴药止汗，及阳气之既动也，以阳药止汗。而龙骨牡蛎、黄耆、五味收涩之药，则两方皆可随宜用之。」（当に陽気が動いていない時には陰薬をもって汗を止め、陽気が既に動いていれば、陽薬で以って汗を止める。竜骨牡蠣、黄耆、五味子で収斂し、陽薬と陰薬両方を用いるのが良い）。この症例の場合では非常に強い汗に対して、陽薬の桂枝や附子を用いて治療を行ったわけです。